エリック・ホブズボーム著
河合秀和訳

『わが20世紀・面白い時代』

評者：佐伯　哲朗

著者ホブズボームは，日本での翻訳の多い歴史家である。彼の膨大な著書を熟読しているとは言えない評者ではあるが，彼の多くの著書とはとりあえず切り離して自伝としての本書について論じることは可能であると思われる。もとより，評者にその能力があるか，この「読書感想文」がその課題に応えているかどうか議論の余地はあろうが，若干の紹介と感想を記述したい。

本書は，序のほか，23の章から成り立っているが，「分水嶺」という題のつけられた第13章をもって，大きく２つに分けられる。前半は自らの生い立ちや経歴，経験したことが主の叙述であり，後半は著者個人の歴史であるよりも，交際した人びとのことや考えたことなどについての記述が主である。

本書は，「面白い」という表題を含む本であるが，この本それ自体は誰が読んでも面白いという本ではないであろう。書評や紹介記事の類も，加藤哲郎氏による簡単な紹介以外には評者は知らない。もちろん，日本での紹介が少ないことは，本書の重要性を否定することではない。本書に含まれる情報は，さしあたり日本語で読むことのできる本に限定するとしても，他の本に含まれていないような，きわめて貴重な情報である。著者は，ある国に生まれてその国で生涯を終える人間からすれば，変わった経歴を持つ人物である。イギリス国籍を持ちながらも，エジプトのアレキサンドリアで生まれ，ウィーンやベルリンで成長するという経歴は，本書の情報を豊かなものにしている。著者が定住した国だけでも，オーストリア，ドイツ，イギリスの３カ国にわたり，定期的に１年のある時期を過ごしたアメリカ合衆国，さらには講演や旅行のような一時的な滞在を加えれば，ヨーロッパ，アメリカ合衆国，南米，に及ぶ。アフリカについての記述は若い時期の旅行記を除けば多くはない。インドを別にすると，アジアについての言及はほとんどないが，それは欠点というものではない。

本書は，20世紀史である『極端の時代』の裏面である（５頁）らしいが，大事件との関連という点で見ても，1917年からの歴史の一端を教えてくれる。著者は，ナチズム政権の成立，スペイン内戦，第２次世界大戦，冷戦という激動の時代を生き抜いて来た。政治史のなかで著者の経験した諸事件の叙述は，歴史についてのより深い理解へと導いてくれる。

本書に書かれた事柄は，客観的と思われる事実と，著者のものの見方なり考え方とに２つに大きくわけることができる。著者は，特定の政治的立場に立っているから，読む側の反応も読み手の政治的立場によって，異なってくると思われる。著者は，「共産主義者」であり（130頁），「確信的マルクス主義者」である（260頁）。著者は，「われわれの勝利は未来の歴史書のページの中にすでに書き込まれているのだ，マルクス主義に由来するそんな自信がつねにあった」（78頁）と自らの考え方を回想する。

自伝という本書では，１つの事柄について体系的な叙述を期待することはできないが，本書

を読むと様々な事柄についての知識を得ることができる。大学の事情についても，いわゆるユダヤ人（煩雑になるのを避けるため，以下の記述では「いわゆる」を付さない）についても，歴史学についても，共産党についても様々な知識を与えてくれる。特に印象に残ったのは，キングス・コレッジの生活から「伝統の創造」の概念を考えたことに関する記述である（106頁）。そのほかには，思いつくままに列挙すると，オーストリア人の自己意識（11頁），中流階級が体面を保とうすること（23頁），宗教の授業（27頁），ユダヤ人の割礼，姓の変更（31頁）などたくさんある。教育については，ドイツのギムナジウム，イギリスのグラマー・スクール，ケンブリッジ大学のキングス・コレッジなど，教育制度や教育の実態が紹介される。なかでも傑作なのは，ギムナジウムのルーベンゾーン先生についての記述である（62頁）。著者や他の生徒にとっては面白くない授業をした教師であったが，立派な業績を残した研究者であったことを後に知る。これらの事柄については，著者が独自のものの見方を披露している部分と，事実を紹介している部分があるが，その叙述は大変興味深いものである。これに対して，著者のもののとらえ方が出ている点は，1950年代の変化（92頁）を認識している点である。また，ソ連という国家の一端を垣間見た話としてソ連への旅行記は重要な情報である。このほかに著者はアメリカの文化生活に組み込まれている3つの危険（388頁）を指摘する。

私事にわたり恐縮であるが，評者はここ8年ほど比較文化学科で欧米の文化に関連する授業を担当しており，それらの授業を準備する際に，生活文化とでも表現することができる領域についての情報を集めようとしてきた。だが，文化の領域は，政治，経済，思想というようないわばメジャーな領域とは異なり，主に文学を専門とする大学教員のいわば「余技」のような領域で，専門的，体系的な著作は少ない。だからこそ，本書における生活に関する細かい事柄についての記述はきわめて重要なのである。

本書の特徴の1つは，交際のあった人物についての記述である。本書には，家族や親族を別にしてもいろいろな人物が登場する。評者が名前を知っている人を何人か挙げてみても，ケインズ（109頁），ポラード（183頁），ドイッチャー（202頁），トムソン（214頁）。ネーミエ，ポスタン（280頁），ブローガン（377頁）。評者が納得してしまったのは，アーサー・シュレジンガー（2世）と意見がほとんど合わないことであった（116頁）。どのように合わなかったかについては具体的な叙述がないので不明であるが，マルクス主義者である著者とアメリカ流のリベラルであるシュレジンガーとが意見が合わなくても全く不思議ではない。各人についての記述はなかなか読ませる。

本書を読むだけでもかなりの日数を要するし，第9章「共産党員であること」など政治的立場を問題にする記述が少なくないので，中味について考えること自体がかなりのエネルギーを必要とする。エネルギーを要するのは，著者の考え方に大きな違和感を持つ箇所があるからである。特に違和感を覚えた箇所を2つほど挙げると，アウシュビッツ収容所内での党費について「党が党費を集められたということ自体，党の集団的な抵抗能力を雄弁に証明していた」（138頁）という記述や，地球規模での核戦争について「相手側の払う犠牲に限度を認めなかった」（195頁），との記述がある。

著者についてよく知っている訳ではないので，素朴な感想になるが，本書を読んで著者の意外な一面を見た。人間ホブズボームは，人間の美醜を問題にする人であったことがわかる。さらに，その区分は，「美」と「醜」あるいは

「完全」と「不完全」という二元論（あるいは二項対立論）である。もちろん多くの人は自らの外見について劣等感（あるいは，まれには優越感）を持っているであろう。だが，いわゆる進歩的なはずの知識人は一般に，自伝に人間の美醜に関することを何度も何度も書くことはしないであろう。この点でも，著者は評者の理解を超えるところがある。

このようなところはあるが，本書の豊かな内容については，実際に本書を読んでいただくしかないであろう。それは，評者による貧弱な紹介文よりも格段に面白いことは間違いない。

（エリック・ホブズボーム著（河合秀和訳）『わが20世紀・面白い時代』三省堂，2004年７月，423＋15頁，定価4400円＋税）

（さへき・てつろう　法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）

最新号

働きすぎ 労働・生活時間の社会政策

社会政策学会編［社会政策学会誌第15号］　●3150円

I　共通論題＝労働・生活時間の構造変化から見る社会政策
農民の時間から会社の時間へ……斎藤　修
ジェンダー視点からみた労働・生活時間の配分構造……水野谷武志
EU労働法政策における労働時間と生活時間……濱口桂一郎
実行可能な労働時間政策を求めて……久本憲夫
〔座長報告〕長時間労働の歴史・現在・未来……田中洋子

II　テーマ別分科会＝報告論文と座長報告
DV法の成立・改正と被害者支援策の課題……原田恵理子
東京都障害者政策の総合的研究……荻原康一
鉄鋼社外企業における合理化と労働編成……上原慎一
社会政策から労働問題へ……山本　潔
1950年代・60年代・70年代の労働問題認識パースペクティブの変容の検証……下田平裕身
British Social Policy under the Blair Governments……Michael Hill
〔座長報告〕

III　投稿論文
ジェンダー視角から見た全電通「育児休職」協約化の成立過程……萩原久美子
イタリアにおける移民労働者と家事・介護労働……宮崎理枝
東京における商店街動向と産業振興施策の課題……宮寺良光

法律文化社　〒603-8053　京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71＊価格は定価（税込）
☎075(791)7131 FAX075(721)8400　http://www.hou-bun.co.jp/

社会政策学会誌バックナンバー　A5判／平均280頁／2730～3150円

⑦経済格差と社会変動
⑧グローバリゼーションと社会政策
⑨雇用関係の変貌
⑩現代日本の失業
⑪新しい社会政策の構想
⑫社会政策学と賃金問題
⑬若者―長期化する移行期と社会政策
⑭少子化・家族・社会政策